

(公民) 傾向と対策

傾向

2026 年度入試から出題範囲が拡大し「公共, 政治・経済」に

①出題形式

立正大学では、いずれの方式・日程でも、全ての設問がマーク式を使った選択式であり、記述式・論述式の設問はない。R方式のみ、「国語」と合わせて2科目分として受けることになり、大問数2、マーク数25という構成である。それ以外の5日程では、大問数4、マーク数40という構成になっている。R方式では比較的長めの会話文、やや凝った作りの設問が目立ち、マーク数が少ない分、思考力・読解力を用いてじっくり解答することが、特に要求されている。それ以外の5日程では、入試問題として比較的オーソドックスな、リード文への空欄補充、1～2行の4つの選択肢から該当するものを一つだけ選ぶ設問などが多くを占める。ただし例外もあり、一つの設問に対し、解答するのにかなり時間を要するものもある。また主に経済分野で、計算が必要になる設問もある。なお試験時間について、R方式のみ、「国語」と合わせて2科目で80分。それ以外の5日程は、1科目単体で60分の試験時間となっている。

②出題内容

2026年度入試から方式・日程を問わず、高校の新課程カリキュラムを踏まえて出題範囲が拡大している。2025年度まで問題冊子に書かれた科目名はいずれも「政治・経済」であったが、2026年度から科目名の記載がいずれも「公民」となり、出題範囲に「公共」の内容が加わることで、実質的に「公共, 政治・経済」の試験問題となっている。「公共」特有の内容として、思想・哲学関連の出題がなされている。例えば「文化相対主義」「自民族中心主義」「リバタリアニズム」「セン」「ロールズ」「ハーバーマス」「アーレント」などの語句・人名が選択肢に見られるようになった。一方、従来型の政治分野、経済分野の内容としては、高校の授業では触れられにくい、個別具体的な事項を扱っている出題も見られる。例えば地方公共団体の「自治事務」に該当するものを、「戸籍事務」「旅券の発行」「介護保険サービス」「国道の管理」のうちから一つ選ぶという設問であり、受験生が苦手としがちなパターンである。またすでに述べられた通り、計算問題も出題されている。様々な統計データを用いた表やグラフの適切な読解も求められる。総じて、高校の「公共」および「政治・経済」で履修する全範囲が出題内容になっている。加えて、文章や表・グラフを適切に読解する能力も、合格のためには必要になってくると言える。

③難易度

一部に易しい設問が見られたとしても、全問を楽に正解していけるような難易度ではない。極端に細かい事項が問われる設問は、多くの受験生が解けないはずなのであまり気にしなくても良いが、基礎的・標準的な内容の設問は、受験勉強で得た堅実な知識を土台に、着実に正解していかなければならない。特に、政治制度や選挙制度をめぐる事項や、経済分野での種々の計算問題などは、パターン化されているものも多いので、反復して過去問に取り組むことで、得点源にしていく必要がある。

対策

共通テストの「公共、政治・経済」も活用しよう

上述のように、2026年度入試から「公共」分野が加わり対策が必須となったが、過去問の数がまだ多くないので、「公共」特有の知識をどう整理していくか、多くの受験生が悩ましく感じていることだろう。「公共、政治・経済」および「地理総合／歴史総合／公共」の科目がある大学入学共通テストの本試験・追試験の過去問を、積極的に活用するようにしていこう。「公共」分野では、文章、表やグラフの読解問題が特に多くなる傾向があることにも注意。またカント、功利主義、ロールズなど、政治哲学とも関係する重要な思想家・思想については、「公共」に加え「倫理」の教科書や過去問なども活用して、深いところまで理解しておくことを心がけよう。従来型の「政治・経済」の範囲の中では、経済学史上の経済学者や経済理論にも注意しておこう。リカード、マルサス、マルクス、ケインズ、フリードマンなど、有名な経済学者の主張内容を自分の言葉でも説明できるようになっておき、他の経済学者とどこがどう違うのか、区別もできるようになっておくこと。また思想、政治、経済などのそれぞれの内容で、「その事項をきちんと理解していないと解けない」という出題も多く見られるので、「入試が近付いたら直前期に短期集中で暗記を行い、乗り切ろう」などとは絶対に考えないこと。出題範囲に含まれている全ての事項を、地道に、その都度納得しながら一項目ずつ着実に学んでいき、中長期的な受験勉強をベースに、最後に安定して合格を勝ち取るようにする、というイメージを持とう。なお、R方式はやや変則的な受験形態になるので、試験本番でペー配分などを乱されないよう、事前に必ず関連情報を把握しておくこと。